

トルストイ★★★

戦争と平和 II

中村融 訳

世界文學大系

39

世界文学大系 39

トルストイ ★★★

昭和34年12月20日発行

定価 450 円

訳 者 中 村 融

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替 東京 165768 電話(29)局 7651

目次

戦争と平和

中村融

第三編

5

第四編

248

エピソード

391

芸術家トルストイ

山ツ
下
ア
イ
肇
ク

459

解説

中
村
融

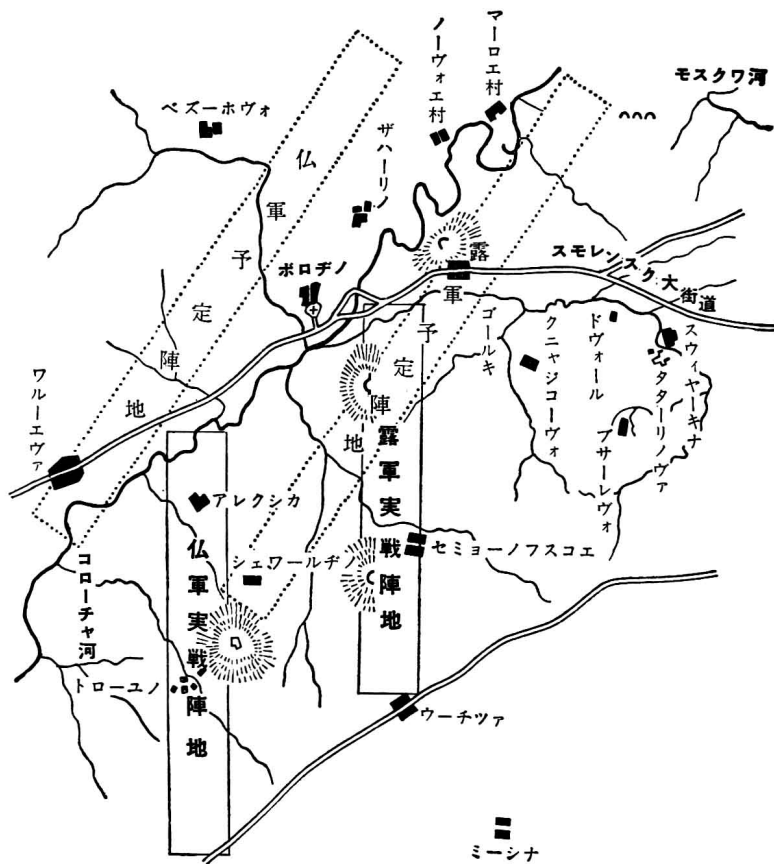
467

年譜

476

装
幀
庫
田
彙

トル
スト
イ
★
★
★



ボロヂノ戦役略図

戦争と平和

第三編

第一部

一

火、殺人を世界の全裁判所の記録が数世紀かかって集めきれぬほど無数に犯し合い、しかもこの時期にそれを犯した人々はこれを犯罪とは見なしていなかったのである。

この異常な事件を生んだものは何か？ その原因は何であったか？ 歴史家たちが素朴な確信をもってこの事件の原因としてあげているのは——オルデンブルグ大公に対して加えられた侮辱、大陸封鎖令の不履行、ナポレオンの政権欲、アレクサンドル帝の強硬態度、外交家たちの失策等々である。

それなら、メッテルニツヒや、ルミヤンエフや、もしくはタレイランが謁見や夜会の合同にうまく立ち廻って、もう少し手際よく通牒を書くとか、あるいはナポレオンがアレクサンドル帝に対して、（陛下、わが兄弟よ、余はオルデンブルグ大公に公国を返すことを承知する）とでも書きさえすれば——それで戦争はなかつたことになる。

同時代の人々に事件がこのように映ったことは当然である。また、ナポレオンにとつて、戦争の原因がイギリスの陰謀だと思われたことも（セント・ヘレナ島でもそう言っていたが）無い理由はない。またイギリスの国会議員たちに戦争の原因がナポレオンの権勢欲にあると思われたことも、オルデンブルグ大公にはそれが自分に加えられた暴力だと思われたことも、商人たちにはそれがヨーロッパを荒廃せしめた大陸封鎖政策にあると感じられたことも、老兵や老将軍たちが主な原因を彼らを実地に利用する必要性

にあると見たのも、当時の正統主義者たちが〈正義〉を回復する必要からだと考えたのも、当時の外交家たちにとつて一八〇九年の露墺同盟をたくみにナポレオンから隠しきれなかったことと、第一七八条の〈メモ〉の書き方が不手際だったことからいっさいの事態が生じたと思われたのもうなずける。さらにまた、観念の無限の原因が当時の人々に思い描かれたことも理解し得るところである、しかし、この生じた事件の大きさを全面的に観照し、その単純にして恐るべき意義を究めようとしつつあるわれわれ後世の者にとつては、これらの原因では充分だとは思われない。われわれとしては、幾百万のキリスト教徒たちが、ナポレオンが権勢欲に目がくらんだとか、アレクサンドル帝が強硬だったとか、イギリスの政策が老獪だとか、オルデンブルグ大公が侮辱されたからとかいうことで互に殺し合ったり、苦しめ合ったりした、ということは納得ができない。そういう事情は殺人暴行の事実そのものとういう関係をもっているのか、大公が侮辱されたからといって、なぜ数千の人々がヨーロッパの果てから襲来してスモレンスク県やモスクワ県の人々を殺したり、滅ぼしたり、あるいは逆に殺されたりしたのか理解に苦しむのである。

われわれのように、歴史家でもなく、研究の過程に促われずに、したがって曇りない常識をもって事件を観照している後世の者にとつては——この原因は無数に想像される。原因の究明

一八一一年の末から西欧の武装強化と兵力集中が始まり、一八一二年にはこの兵力——何百万という人員（軍隊の輸送、給与に携わった人も含めて）が西から東へとロシアの国境目指して移動されたが、そこへは、同じく一八一一年以降はロシアの兵力も集結されつつあったのである。六月十二日、西欧軍はロシアの国境を越え、ここに戦争が始った、すなわち、人間の理性及びあらゆる人間性にもとる事件が行われたのである。幾百万という人々が互に悪事、欺瞞、裏切り、窃盗、贋札の製造発行、略奪、放

に没入すればするほどわれわれにはいよいよ多くの原因が発見され、その取り上げられた原因はどれ一つをとっても、また総体としてみても、それ自体としては一様に正しく思われるが、また事件の巨大さとくらべてあまりに些細であるためと（たまたま重なり合った他の原因なしには）事件を起こすにはあまりに無力であるために一様に誤っているようにも見えるのである。われわれとしては、ナポレオンがその軍隊をヴィスラ河の対岸へ退却させることとヤオルデンブルグ公国を返還することを拒絶したことが同様に、フランスの一伍長が再度の勤務につくのを望むか望まないかということもこの事件の原因と考えられる。なぜかと言えば、もしもこの伍長が勤務につくことを欲せず、さらに第二、第三と千人もの伍長や兵がこれにならえば、ナポレオンの軍隊にはそれだけ兵員が減るわけで、したがって戦争はあり得なくなつたかもしれないからである。

もしもナポレオンがヴィスラ河のかなたに退却せよという要求に立腹せず、軍に進撃を命じなかつたなら、戦争はなかつたかもしれないが、もしもまたすべての軍曹が再度にかつたる服務を望まなかつたとしても、戦争はやはり起こり得なかつたかもしれないのだ。さらにまた、もしイギリスの陰謀もなく、オルデンブルグ大公というものもいらず、アレクサンドル皇帝に侮辱感もなく、ロシアに専制権力もなく、フランス革命やそれにつづく独裁や帝制もなく、フランス革命を誘発せしめたいっさいの事情もない：

；等々と仮定したら、やはり戦争は起こり得なかつたであろう。これらの原因の一つでも欠けていたら、べつになにも起こるはずはなかつたのだ。つまり、これらすべての原因——数十億の原因——は事件を誘発するためにたまたま同時に生じたわけである。したがって、事件の独占的な原因というものはなにもなく、事件は単に起こるべくして起つたというにすぎない。数百万の人々がおのれの人間らしい感情や理性を捨て去つて西から東へ進み、自分の同類を殺さなければならなかつたのは、ちょうど数世紀前に人間の群れが同類を殺しつつ東から西へ進んでいったのとまったく同じことである。

事の成否もその言葉いかんにかかつていたと思われるナポレオンやアレクサンドル帝の行動も——籤や召集によつて出征した兵卒一人一人の行動と同じくたいして勝手気儘なものではなかつた。これはこれ以外にはなりようがなかつたのである。なぜかと言えば、ナポレオンやアレクサンドル（事件を左右し得ると思われていた人々）の意志が遂行されるためには無数の事情が重なり合うことが必要で、その一つが欠けても事件は起こり得なかつたかもしれないからである。実行力をその手に握つている数百万の人々——射撃をしたり、糧秣や砲を運搬したりした兵隊たち——が個々の、弱い人々のこの意志の履行に同意した上で、複雑多岐な無数の原因によつてそれに導入されなければならなかつたからである。

歴史においては、宿命論というものは不合理

な現象（つまりその合理性をわれわれが理解できない現象）を説明するためには避けられぬものである。歴史上のこれらの現象をわれわれが合理的に説明しようとするればするほど、それはますますわれわれにとつて不合理な、不可解なものになつてゆく。

人はだれでも自分のために生き、自分の個人的目的を遂げるために自由を用い、自分は今、ある行為をすることもできれば、しないでもすむことをその全存在をもつて感じている。しかし、彼がそれをなしとげるとたちまちにして、時の流れのある一瞬に完了したその行動はもはや帰らぬものとなり、歴史の所有するところとなり、その中でそれは自由を失つた、先天的な意義をもつようになるのである。

人間にはだれにも生活に二つの面がある——その興味が抽象的になればなるほど自由になる個人的生活と、人間が自分に定められた法則を否定なしに履行してゆく場であるところの不可避的な、集合的な生活とである。

人は自分のために意識的に生活するが、歴史的な、全人類的な目的達成のためには無意識的な道具の役をも果たしている。ひとたび行われた行為はもとへもどることなく、その行為は時の流れの中で他人の無数の行為と合流して歴史的意義を帯びるのである。人は社会的段階の高所に立てば立つほど、いよいよ多くの人々と関係をもちつて、他人に対してますます大きな権力をもつようになり、またその個々の行為の宿命や不可避性がいっそう明らかになつ

てくる。

《王者の心は神の御手のうちにあり》

国王は——歴史の奴隷である。

歴史、すなわち人類の無意識的、全体的、集団的生活は国王の生活のあらゆる瞬間を自分のため、つまりおのれの目的のための道具として利用するものである。

ナポレオンは現在、つまり一八一二年には、
 〈国民の血を流すか否かは〉(彼にあてたアレクサンドル帝の最後の手紙の一句)おのれの一存にかかっていることをかたてないほど痛切に感じていたにもかかわらず、一般のため、歴史のために当然なざるべきことを行わされるという(自分一個については自由に振舞っているつもりでも)例の避けられぬ法則に今ほど服していたことはなかった。

西欧の人々は互に殺し合うために東方に動いていった。そして原因重複の法則によって自らもそれに同調し、この運動と戦争のための数千にのぼる些細な原因——大陸封鎖令を守らぬという非難、オルデンブルグ大公、単に武装平和を得るためにのみ企てられた(とナポレオンには思われていた)プロシヤへの出兵、たまたま国民の気運と合致した戦争に対するフランス皇帝の愛好と習慣、大規模な準備に対する魅力、準備の出費、その出費を償いうるような利益を得たいという要求、ドレスデンでの陶然たる歓迎ぶり、当時の人々の見解によれば、平和を達成したいという心からの希望をもって行われな

から双方の自尊心を傷つけるに終わったとされている外交交渉、及び将来起こるべき事件に同調しつつそれに合体した無数の他の原因など——と合致したのである。

熟すればりんごも落ちる——なぜ落ちるのか? 地球の引力か、芯が枯れるからか、太陽に乾されるからか、重くなるからか、風が揺するからか、それとも下に立っている男の子がそれを食べたがるからか?

どれも原因ではない。これらはいずれもあらゆる生命ある、有機的、自然発生的な事件が生じる際の諸条件の一致にすぎないのである。りんごが落ちるのは細胞質が分解し云々と説く植物学者は、自分が食べたくて落ちるように祈ったから落ちたのだと言う樹下の少年と同じく正しいであろう。同様に、ナポレオンがモスクワへ赴いたのは彼がそれを欲したからであり、彼が減じたのも、アレクサンドルがその滅亡を欲したからだという人が正しくもあり、正しくもないのは——ちよど百万プードも掘りえぐられて崩れかけていた山が崩れ落ちたのは、最後の坑夫がつるはしの最後の一撃をそれに加えたためだ、という人が正しくもあり、正しくもないのと同じである。歴史上の事件で、いわゆる偉人と称せられる人々はその事件に名称を与えるレッテルであり、レッテル同様に、事件そのものとはもつとも関係の少ないものである。自分たち自身にとっては自由勝手なものと思われている彼ら偉人のどの行為も、歴史的な意味では自由勝手なものではなく、歴史の歩み全

体と関連していて、世の初めから定められているものなのである。

二

五月二十九日*にナポレオンは、皇族、大公、諸国王、それに一人の皇帝さえ加えた宮廷人たちに囲まれて三週間ほど滞在したドレスデンを發った。出發に先立ってナポレオンは自分に尽してくれた皇族や、王や、皇帝の労をねぎらい、自分が不満だった王や皇族を譴責し、オーストリアの皇后には自分の所有品、つまり他の王たちから取り上げた真珠やダイヤモンド類を贈り、皇后マリヤ・ルイザをやさしく抱き、かの歴史家の言うように別離の悲嘆のうちに彼女を残していったが、彼女——このマリヤ・ルイザはパリにはもう一人の皇后が残っていたのに彼の皇后とされていたので、この別離には耐えきれぬようだった。外交家たちは平和の可能をまだ確信して、その目的をもって誠心誠意の活動をつづけていたにもかかわらず、またナポレオン皇帝自らもアレクサンドル帝に書簡をしたためた中で彼を「わが兄弟なる陛下よ」と呼び、自分が戦争を欲しないこと、自分は永久に陛下を敬愛するであろうことを心から断言しておきながら、——しかも彼は自ら軍隊に赴いては、西から東への軍の移動を急ぎ立てる目的をもった新たな命令を駆ごとに出していたのである。彼は小姓、副官、護衛などにかこまれて、六頭立の旅行馬車でポーゼン、トルン、ダンチツヒ、ケーニヒスベルグへ向かう街道を進んで行った。

これらのどの都市でも数千の人々が興奮と歡喜をもって彼を迎えた。

軍は西から東へと進み、替え重ねた六頭立の馬車も彼を同じ方向へと運んでいった。六月十日に彼は軍に追いつき、ヴィリコヴィスの森にあるポーランド某伯爵の領地にかねて用意の宿舎に一泊した。

翌日、ナポレオンは軍を追い越して、幌馬車でネマン河近くまで進み、渡河点を視察するためにポーランドの軍服に着換えて、岸辺へと乗り出した。

対岸にコザツクと、その昔マケドニヤのアレクサンドル王が侵入したスキタイ国そっくりの帝国の首都たる「聖都モスクワ」を中心にした一面の草原を見とどけるや、——ナポレオンは戦略上の考慮も外交上のそれも顧みず、すべての人々の意表に出て進撃を命じ、翌日には彼の軍はネマン河を渡りはじめた。

十二日の早朝、彼はこの日にネマン河のけわしい左岸に張られた天幕を出た、そしてヴィリコヴィスの森から流れ出てネマン河に架けられた三つの橋の上にあふれている味方の軍の流れを望遠鏡でながめやっていた。軍隊のほうでも皇帝の出御と知って、眼でその姿を探し求めていた。そしてフロック・コートに帽子をかぶり、随員たちから離れて立っている人影を山上の天幕の前に見つけると、彼らは帽子を高く投げ上げて「皇帝万歳！」と叫び、それまで彼らを隠していた広大な森から果しもなく次々とたえず流れ出て来て、ばらばらに分かれて三つの橋を

対岸へと渡っていった。

——へさあ、いよいよ進撃だぞ。おお！ 陛下が手を下されると、なんてこう物事がとんとん拍子にゆくのだろうか……畜生め……ほら陛下だ！……皇帝陛下万歳！ ほれ、あれがアジアの草原さ！ やっぱいいや南国だなあ！ ジャ、あばよ、ポーシェ。モスクワで一番いい宮殿をお前に残しておいてやるよ。じゃ、あばよ！ ご機嫌よう……お前、皇帝陛下を見たかい？ 皇帝万歳！……帝！ なあ、ジェラル、もしおれがインドの総督になったら、お前をカシミールの大臣にしてやるぞ、きつとだ。皇帝万歳！ 万歳！ 万歳！ コザツクのならず者どもが、どうだあの逃げっぷりは。皇帝万歳！ ほら陛下だ！ お前見えるかい？ おれは二度見たぞ、お前をこうして見るようにな。ちびの伍長……おれは陛下が一人の老兵に十字章をかけてやっているのを見たぞ……皇帝万歳！ 性格も社会上の地位もじつにさまざまな老人や若者たちの声がそう言っていた。これらの人々のどの顔にも待望久しかった遠征開始の喜びと、灰色のフロック姿で山上に立っている人に対する歡喜と忠誠の表情が共通して表われていた。

六月十三日、ナポレオンには小柄ながら純血種のアラブ馬が差し出され、彼はそれにまたがると、たえず歡聲に耳を聳えながらネマン河の橋の一つへとギャロップで進んでいったが、その歡聲を彼は、それによって彼らが自分に対する愛情を表現している以上、これを禁止する

わけにもいかないということをやつと我慢しているらしかった。しかし、行く先々でつきまといわれるこの歡聲は彼を悩ましたばかりでなく、軍といっしょになって以来、心を捉えていた軍事上の配慮から彼の心をそらしてしまうのだった。彼はポートの上で揺れている橋の一つを対岸に渡り終えると、軍隊のあいだに通路を開きながら彼の先に立って疾駆する幸福にじびれて歡喜した近衛騎兵の一隊に先導されて急に左へ折れて、コヴノの方向を目ざしてギャロップで飛ばしていった。洋々たるヴィストラ河に近づくと、彼は河岸に駐屯していたポーランド騎兵の傍らに馬をとめた。

——万歳！——ポーランド兵たちは列を乱し、彼の姿を見んものと互に押し合いながら、やはり歡喜してそう叫んだ。ナポレオンは河を見わたしてから馬を下り、岸辺にころがっていた丸太の上に腰をおろした。無言の合図によって望遠鏡が差し出されると、彼はそれをいそいそと駆けよってきた小姓の背中にすえて、対岸を見はじめた。ついで彼は丸太のあいだにひろげられた地図の検討に没頭してしまった。彼が頭もあげずになにか言うと、二人の副官がポーランド騎兵のほうへ走っていった。

——なんだろう？ 陛下はなにをおっしゃったんだろう？——副官の一人が槍騎兵たちのほうへかけつけた時、彼らの列中からそういう声が聞こえた。

それは、浅瀬をさがして、対岸へ渡れという命令が出たのだった。ポーランド槍騎兵隊の連

隊長は、美男の老人だったが、興奮に顔を赤くし、しどろもどろの言葉つきで、浅瀬など探さずに部下の槍騎兵とともに河を泳いで渡つてはいけないうか、と副官にたずねた。彼はまるで少年が馬に乗せてくれとでもせがむように明らかに拒絶されるのを恐れる様子で、皇帝の面前で河を泳ぎわたる許しを乞うていた。副官は、おそらく陛下もこれを熱意のあまりとして不満には思われまいと言った。

副官がそう答えるや、口ひげを生やした老将はうれしげな顔に眼を輝かせ、サーベルを高く振りかざすと、「万歳！」と絶叫した、そして部下に向つて、われにつづけと号令したと思ふと、馬に拍車をくられて、河のほうへと飛ばした。彼は鞍の下でためらう馬を思いきり蹴りつけ、急流の深みをめがけて、水中へざぶりとばかりに飛び込んだ。数百の槍騎兵がそのあとから走り出した。中程の急流のところは冷たくて気味が悪かった。槍騎兵たちは馬から落ちて互にもつれ合った。何頭かの馬が溺れ、人も溺れ、残った者たちは、あるいは鞍に、あるいはたてがみにしがみついて泳ごうとした。彼ら是对岸に向つて泳ぎ進もうとひたすら懸命で、半露里先には渡河点があつたのに、丸太に腰をおろして彼らのしていることに眼もくれぬ人の眼の前でこの河を泳ぎ、かつ溺れることを誇りとしていたのだ。もどつてきた副官が折を見て、皇帝に対するポーランド兵たちの忠義ぶりに彼の注意を思いきつて促すと、灰色のフロック姿のその小柄な人物は立ち上つて、ベルチエをそ

ばへ呼びよせ、命令を与えながら、ともに岸辺を行きつもどりつしはじめ、自分の注意を散らす溺れかけた槍騎兵たちのほうに時たま不満げに眼をやるばかりだった。

彼にとつては、アフリカからロシアの曠野にいたる世界のあらゆる果てにおいて自分の存在が同じように人々を震駭させ、われを忘れた無分別にまで駆り立てるにきまつているという確信はけつして珍しいものではなかつた。彼は馬を呼ぶように命じて、宿舎へ帰つていった。

四十名近くの槍騎兵が、救助船が出されたにもかかわらず、河で溺死した。大半はもとの岸辺へと押しもどされた。連隊長と数名の兵だけが河を泳ぎ渡つて、辛うじて対岸へ這い上つた。しかし、彼らが滝のように水の流れるずぶ濡れの服のまままで這い上つて、ナポレオンの立っていた場所を狂喜してながめながら「万歳！」を絶叫した時には、その人の姿はすでにそこにはなかつた、そして、しかもその時、彼らは自らを幸福に感じていたのである。

その晩ナポレオンは二つの指令のあいだに——その一つはロシアに持ち込むために準備された鷹造ロシア紙幣を一刻も早く届けよという命令で、他の一つは、手紙を回収されたためにフランス軍の配置の情報が発覚してしまつたサクソニヤ人を射殺せよという指令だった、——さらに第三の指令を与えたが、それは必要もないのに河へ飛びこんだポーランド連隊長を、ナポレオン自らが隊長になつている（名譽部隊）へ編入せしめよ、という命令だった。

（神は罰せんと欲する人々を狂気となす）

三

この間、ロシア皇帝は閩兵や演習を行いつつ、すでに一月以上もヴィリナに暮らしていた。

誰もが期待し、皇帝もその準備のためにペテルブルグから赴いて来たのだったが、その戦争のための準備はなに一つできていなかった。全般的な作戦計画もなかつた。提出されたあらゆる計画の中からどれを採用すべきかというところについての不決断は一月にわたる皇帝の大本営滞在ののちにはいよいよ深まりゆくばかりだった。三つの軍隊には各個に総司令官がいたが全軍を統べる総指揮官というものがなく、皇帝もこの地位を引き受けようとはしなかつた。

皇帝のヴィリナ滞在が長びけば長びくほど、戦争を待ちくたびられるばかりで、その準備はますますできなくなつた。皇帝側近の人々の努力はひたすら皇帝に快適な時をすごさせて、差し迫つた戦争を忘れさせることにのみ向けられているように見えた。

ポーランドの大官や、廷臣たちや、皇帝自身のもとで催された数多くの舞踏会や祝宴のあと、六月になつてから、ポーランドの一等従将官が、侍従将官全員の名で皇帝のために晩餐会と舞踏会を開くことを思いついた。この思いつきは一同によつて喜んで採用された。皇帝も承知の意を表明した。侍従将官たちは予約という形で金を集めた。もつとも皇帝に好感をもたれそうな貴婦人が舞踏会の女主人役として招かれた。ヴ

イリナ県の地主であるベニグセン伯爵はこの祝宴のために郊外の別荘を提供しようと申し出た。そこで六月十三日に晩餐会と、船遊びと、花火とがザクレトにあるベニグセン伯爵の別荘で催されることになった。

ちょうどネマン渡河命令がナポレオンによって発せられ、彼の前衛軍がコザツク軍を撃退してロシアの国境を越えた当日、アレクサンドル帝はベニグセンの別荘で——侍従将官たちによって催された舞踏会で一夜をすごしていたのである。

それは陽気な、輝かしい祝宴だった。友人筋のあいだでもこれほどの美女麗人が一堂に集つたことはめつたにないという評判だった。ベズーホフ伯爵夫人も皇帝についてペテルブルグからヴィリナへ来たロシアの貴婦人たちとともにこの舞踏会に出席し、例の押出しのいい、いわゆるロシア的な美貌で繊細なポーランドの貴婦人連の影をうすくさせていた。彼女は人目を惹き、皇帝さえ彼女に踊りの相手を許したほどだった。

モスクワに妻を残してきたポリース・ドルベツコイも彼の言葉をかりれば「独身者」として同じくこの舞踏会に出席していた、そして侍従将官でこそないが、舞踏会の醸金でも大口を受け持っていた。ポリースは今や富豪としていちだんと人々の尊敬を受け、もはや庇護を求めるところか、同輩の中の最高の連中と肩を並べていた。彼はこのヴィリナへ来て、久しく顔を合わせなかったエレンに会ったが、以前のこと

は記憶にもなかった、しかもエレンはさる大官の寵を受けていたし、ポリースはポリースで新婚々でもあったので、二人はただ古い親友として顔を合わせただけだった。

夜の十二時になつても踊りはまだつづいていた。ふざわしい相手をもつていなかつたエレンは自分からポリースにマズルカを申し込んだ。二人は第三組にあつた。金を申し込んだばかりすんだ紗の服から突き出ているエレンのまばゆいばかりの、露わな肩に冷やかに眼をやりながら、ポリースは昔の知人たちの話などをしていたが、同時に他人はもとより自分自身も気づかぬように、同じ広間にいた皇帝を観察することを片時もやめなかつた。皇帝は踊りはやらないで、戸口にたたずんだままで、彼のみが口にし得るやさしい言葉でそちこちの人々の足をひきとめていた。

マズルカが始つたころ、ポリースは、皇帝側近の一人である侍従将官バラシエフが皇帝のほうへ進みより、ポーランド貴婦人と話していた皇帝のそば近くに宮廷の礼儀をも顧みず立ちどまつたのを見とどけた。貴婦人との話がすんだところで、皇帝は訝しげにちらりとバラシエフを見やうとしたが、相手がこんな振舞いをするたのにはそれだけの重大な理由があるのを悟つたらしく、婦人に軽くうなずいて、バラシエフのほうに向き直つた。バラシエフが口を開いたと思うと、皇帝の顔には驚愕の色が現われた。彼はバラシエフの腕をとり、眼の前で両側に退いた人々のあいだに無意識に六、七メー

トルの広い道を自分に開きながら広間を抜けていっしょに歩き出した。ポリースは皇帝がバラシエフと並んで歩き出した時にアラクチェエフの興奮した顔つきに気づいた。アラクチェエフは上眼づかいに皇帝をながめやり、赤い鼻をわずかに鳴らしながら、皇帝から言葉かけられるのをさも予期しているように群衆の中から進み出た。(アラクチェエフがバラシエフを嫉み、なにやら重大なニュースが彼を素通りして皇帝に伝えられたことに不満らしいのをポリースは見てとつた。)

が、皇帝とバラシエフとはアラクチェエフには気づかずに出口のドワから照明のついた庭へと通りぬけていった。アラクチェエフは剣を握りしめ、いまいまげに周囲を見廻しながら二十歩ほどの間隔をおいて二人のあとからついて行つた。

ポリースは、マズルカのフィギュアをしつづけながらも、どんなニュースをバラシエフはもたらしたのだろう、どうしたら、それを人より先に察知できるだろうという考えに苦しめられつづけていた。

別の婦人を相手に選ばなければならぬフィギュアのときに、彼はエレンに向つて、バルコニーに出ていったらしいポトツキ伯爵夫人を選びたいから、とささやくと、寄木細工の床の上をすべるようにして出口から庭へ入つて、バラシエフといっしょにテラスへ入つて、皇帝の姿を認めて、立ちどまつた。皇帝とバラシエフとはドワのほうへ向つてきた。ポ

リースは後へひきさがる暇もないといったふう
に狼狽してみせ、側柱のほうにかしこまって身
をよせて頭を下げた。

皇帝は一身に侮辱を受けた人の興奮をもって、
次の言葉を言い終えかけていた——

——宣戦もなしにロシアに侵入するとは！

余は、敵の武装兵が一兵たりともわが領土内
にとどまる限り、講和はしないぞ、——と彼は言
った。ポリースの察したところでは、皇帝には
その言葉を口にしたのが快かつたらしく、おの
れの思うところを表現する形式にも満足らしか
つたが、ただポリースの耳に入ることが不満
の様子だった。

——だれにも知らせてはならぬぞ！——皇帝
は顔をしかめて、そうつけ足した。ポリースは、
それが自分に向つて言われた言葉だと分つたの
で、眼を閉じて軽く頭を下げた。皇帝はふたた
び広間へ入り、なお半時間近く舞踏会場に残つ
ていた。

ポリースはフランス軍のネマン渡河の報をい
ち早く知つたのである。そしてこのおかげで、
他人には伏せてある多くの事柄も自分は承知し
ていることを幾人かの大官たちに示す機会をつ
かむことができ、それを通じてこれらの人物か
らいちだんと高く評価される機会をもつかん
だわけだった。

フランス軍のネマン渡河というだしぬけの報
道は、期待はずれの一カ月もたつたあげくに、
場所柄が舞踏会でもあったので、ことさら寝耳

に水だった。皇帝はこの報道を受け取つた最初
の瞬間に、憤慨と侮辱感にかられながら、のち
に有名になつた例の文句を発見したが、それは
彼自身にも氣に入つていて、また確かに彼の感
情をあますところなく表わしているものだった。
舞踏会から帰館すると、皇帝は夜中の二時に秘
書官シーシエフを呼びにやり、軍に対する命令
と元帥サルトウイコフ公爵宛の詔勅をしたため
るように言いつけたが、その際、その詔勅の中
に、武装せるフランス兵が一兵たりともロシア
の領土内に留まる限り、講和をするつもりはな
い、という例の文句をかならず入れるようにと
要求した。

翌日には、ナポレオンに対する次のような書
簡がしたためられた。

「わが兄弟なる皇帝よ。昨日余は、誠実をもつ
て陛下に対する余が義務を遵守せしにもかかわ
らず、貴下の軍隊がロシア国境を越えたりとの
報に接し、かつ只今はじめてこの侵入に関して
通告せるロリストン伯爵(駐露大使)の覚書をベテ
ルブルグより受領せしも、それによれば陛下に
はクラークン公爵(駐仏大使)が旅券を請求せし時
以来、余に對して敵對關係にあるものと思考し
おられたるものごとし。余はバッサノ大公が
右の旅券下附拒絶の根拠としたる理由によりわ
が大使の行為が攻撃の動機となりたるものとは
断じて想像もし能わず、また事実、彼の行為が
余の命令によつてなされしものにあらざること
は、彼自らが言明せるところなり。したがつて
余は今回の通報に接するや、ただちにクラーク

ン公爵に對し余の不满を表明し、従前どおり自
己に課せられたる職責を果たすよう命令せり。
陛下にして、もしかかる誤解のためにわが臣民
に流血の惨を惹起せしむる意なく、ロシア領土
より貴下の軍隊を撤収することに同意せらるる
においては、余は既往のいづさいを不問に附す
べく、かくして相互の協定も可能となるべし。
しからざる場合には余は、当方よりなんらの挑
発もなされざりし攻撃を排除するのやむなきに
いたるべし。人類を新たなる戦禍より免れしむ
る可能はなお陛下の掌中にあり。 敬具

アレクサンドル

(署名)

四

六月十三日の夜半二時に、皇帝はバラシエ
フを呼びよせると、ナポレオン宛の書簡を通読
して聞かせた上で、これを携行して直接フラン
ス皇帝に手渡すように命じた。バラシエフを
遣わすにあつて皇帝は、武装敵兵がたとえ一
名たりともロシア領土内にとどまる限り講和は
行わない、という例の文句を事新しくくり返
して、この言葉をかならずナポレオンに伝えるよ
うに命令した。皇帝はその文句はナポレオン宛
の親書にはしたためなかつたが、それというの
も、これらの言葉は、和平交渉の最後の試みを
なす際に伝えるのは適當でないことを、生来の
氣転で感じていたからだった。しかし、バラシ
エフに対しては、それをかならず直接にナポ
レオンに伝達するように命じたのである。

十三日から十四日にかけての夜半にパラシエフは一名のラッパ手と二名のコザックを連れて出立し、未明にはネマン河のこちら側に敷かれているフランス軍の前哨線のあるルイコンテイ村に到着した。彼はフランスの騎馬歩哨によって停止させられた。

深紅の軍服に毛皮帽をかぶったフランスの輕騎兵、下士官が近づいて来た。パラシエフを一喝して、停止を命じた。が、パラシエフはすぐに停止はせずに、並み足で街道筋を進みつつけた。

下士官はしぶい顔をしてなやら悪態をつぶやき、馬の胸先でパラシエフに突きかかるようにしてみせ、サーベルを握り、このロシアの將官を乱暴にどなりつけて、ひとの言葉の聞こえないのはつんぽか、とたずねたりした。パラシエフが名乗りをあげると、下士官は兵を將校のもとへ派遣した。

パラシエフにはかまわずに、下士官は仲間を相手に自分の連隊の話をはじめ、ロシアの將官などには眼もくれなかった。

常日頃から最高權威や威力のそば近くにいる上に、今も三時間前に皇帝と言葉を交わしてきたし、職務上からも尊敬されることに馴れたパラシエフにしてみれば、このロシアの領土内で自分に対する粗暴な力のこの敵対的な、いやそれよりも無礼な態度に接することはなんとも腑に落ちぬものがあった。

陽は今しがた雲のかけから昇りかけたばかりで、大気はすがすがしく、露を含んでいた。路

上へは村から家畜の群れが追い出されてきていた。野面では次々と、あたかも水中の泡のように、雲雀がさえずりながら舞い上っていた。

パラシエフは村から將校が来るのを心待ちにしながら、あたりを見廻していた。ロシアのコザック兵とラッパ手、それにフランスの輕騎兵らは黙ったままで時たま互に相手をながめやっていた。

ベッドから脱け出て来たばかりらしいフランス輕騎兵連隊長が美しい灰色の馬にまたがり、二名の輕騎兵を従えて村から出かけてきた。將校、兵、馬のいずれにも満足を気取った様子があった。

それは会戦の初期のころのことで、軍隊もまだ、ほとんど閫兵時の平和な行動にひとしい整然さを保っており、ただ服装の上に派手な戦士らしさの影を見せ、また会戦の当初にはいつもつきまといているあの陽気さと積極性の精神的な影を帯びているにすぎなかった。

フランスの連隊長は辛うじてあくびをかみ殺していたが、物腰は丁寧で、パラシエフの重要な役目も十分に理解しているらしかった。彼は部下の兵たちのそばを通ってパラシエフを前哨線内に案内し、陛下の宿舎も自分の知る限りでは、遠方ではないはずだから、陛下に拝謁したいという貴下の希望もおそらくただちに容れられるであろう、と告げた。

彼らはフランス輕騎兵の繫馬柱や、歩哨や、自分らの連隊長に敬礼しながらロシアの軍服を物珍しげに見やっていた兵隊たちのかたわら

通ってルイコンテイ村をすぎ、村の反対側に出た。連隊長の言葉では、二キロ先に師団長がいて、それがパラシエフを迎えて、指定どおりの案内に立つ、とのことだった。

陽はすでに昇り、色鮮やかな緑に映えて楽しげに輝いていた。

居酒屋を一軒通り越して山の上に出たとき、出会頭に下のほうから騎馬隊の一団が姿を見せ、その先頭には、陽に照り映えた馬具をつけた黒毛の馬にまたがって、羽根のついた帽子をかぶった背の高い男が、黒髪を肩のあたりに波打たせ、緋のマントをまとい、フランス人が馬に乗るときの癖で長い足を前に突き出した恰好で進んで来た。この男は明るい六月の陽ざしの中で羽飾りや、寶石や、金モールをきらめかしながら、パラシエフのほうへギャロップで乗りつけてきた。

パラシエフと、腕輪や、羽飾りや、頸飾りや、金モールづくめで仰々しく芝居がかった顔つきで彼のほうへ駆けよってきた騎者とのあいだがもう二馬身の距離になったころ、フランス連隊長のユリネルがうやうやしくささやいて「ナポリ王です」と言った。まさしくその人は現在、ナポリ王と呼ばれているミュラーだった。なぜ彼がナポリ王なのか、さっぱり分らなかつたが、人々は彼をそう呼び、彼自身もそうと信じ切っていたので、そのせいで以前よりもいっそうもったいぶった、ものものしい様子をしていたのである。彼は自分が実際にナポリ王だとすっかり信じ切っていたので、ナポリ出立の前

日、妻を伴って町を散歩中に数人のイタリア人が彼に向つて「王さま万歳！」と叫んだとき、愁わしげな微笑を浮かべて妻を振り返り、へきの毒な奴らだ、この連中は、明日、わしに見捨てられるのを知らないんだからな！」と言つたほどである。

しかし、自分ではナポリ王だと確信し、置きざりにした臣民の悲嘆に同情していたにもかかわらず、最近になって、ふたたび軍職につくことを命ぜられて以来、ことにダンテツヒでナポリオンと会見して、この義兄弟からへわしが君を王にしたのは、勝手な流儀によつてではなく、わしの流儀で統治するためだ」と言われて以来、——喜んで昔馴染の仕事につくようになり、ちよど食らい肥りながら脂肪ののらない馬が車に繋がれたのを感じて轆なまこの中で飛びはねるように、彼もできるだけ派手に、贅を凝らして盛装して、自分でも行先も目的も分らぬままに、満ち足りた、陽気な気分でもーランドの街道を駆けつけて来たのだった。

ロシア将官の姿を見るや、彼は肩のあたりに髪を波打させた頭をいかにも王侯らしくもったいぶってさつと後ろへ反らせて、訝いぶかしげにフランス連隊長のほうを見やつた。連隊長はバラシエフの任務を謹しんで王に伝えたが、その姓を発音することができなかった。

——「へド・バル・マシエーヴ！」と王は、（連隊長にふりかかった困難を持ち前の決断力で押し切つて）そう言つた。——「へお近づきなれてたい。そう欣快に思いますぞ、將軍！」

——と彼は国王らしい寛大な身振りを示しながら言い添えた。だが、彼が大声で早口にしゃべりはじめると、国王の威厳などは一瞬にして消し飛んでしまひ、彼は自分では気づかぬうちに、持ち前の人の好い、なれなれしい調子に変わってしまった。彼はバラシエフの馬の前髪に片手をおいた。

——「へそれはそうと、將軍、どうやら戦争になりそうですな」と彼は自分には判断のつかなかつた事態を悔むかのように、言つた。

——「国王殿下！」とバラシエフは答へた、——「へわがほうの皇帝陛下は戦争を望んではおられませぬ、そして殿下も承知のごとく、——とバラシエフは「殿下」という名詞をあらゆる格で使い分けながら言うのだったが、この称号がまだ耳新しい相手に向つてそれを盛んにくり返すのは氣障きざらっぽさを免れなかつた。

ミュラーの顔はムッシュエド・バラシエフの話に聴き入っているあいだ、愚かしい満足に輝いていた。しかし「王位にはその義務もあるので、つまり彼も王として、また同盟者として、国事についてアレクサンドルの使節と語らねばならぬ、と感じていた。そこで彼は馬から下りると、バラシエフの腕をとり、かしこまって待機している随員たちから数歩離れて、もったいぶつた口のきき方をしようと努めながら、いっしょに行きつてもどりつ歩きはじめた。彼は、皇帝ナポリオンが立腹したのは、プロシヤから軍を引き上げよ、と要求されたからであるが、ことに立腹したのはこの要求が世上一般

に知れわたつて、これによりフランスの威信が傷つけられた時であつた、と述べた。バラシエフはそれに答へて、この要求はなんらの侮辱をも含んでいるものではない、と言つた。なぜなら……ミュラーはそれをさへぎつて——

——では、あなたは戦争の誘発者はアレクサンドル皇帝ではない、とお考えなのですか？——彼は人の好い、愚かしげな微笑を浮かべて、だしぬけに言つた。

バラシエフは、戦争の誘発者がナポリオンであると自分が實際考えている理由を述べた。

——「へいや、親愛なる將軍よ、——とミュラーはふたたび彼をさへぎつた、——わたしは双方の皇帝がお互のあいだで事を解決し、わたしの意にそむいて始められた戦争がなるべく速やかに終ることを心から望んでいるのです」——と彼は、主人同士のけんかとは別に、自分たちだけは親切な仲好しでいたいと望む召使の口調で言つた。ついで彼は話題を変えて、大公のこと、その健康のこと、ナポリとともに陽気に楽しくすごした時の思い出などについて根掘り葉掘りたずねた。そのあとだしぬけに、さもおのれの王たる威信を思い出したかのように、ミュラーは大仰に反り身になつて、戴冠式の際に立っていた時とそっくりのポーズで立つと、右手をふりながら言つた。——「へもはやこれ以上、あなたをお引きとめはしますまい、將軍。無事にお使いの役目を果たされるよう望みます。——そして刺繍のついた緋のマントや羽飾りをひるがえし、寶石をきらめかしつつ、彼はかしこ

まつて待ち受けている随員のほうへ歩き出した。バラシエフは今のミニラーの言葉から、間もなくナポレオンその人に引見されるものと予想しつつさらに馬を進めた。ところが、すぐにもナポレオンと会見できるどころか、ダヴーの歩兵軍団の歩哨たちによって、前哨線でのときと同じように、次の部落のかたわらで引きとめられてしまった。そして呼び出されてきた軍団長付副官が彼をダヴー元帥のいる村へと案内していった。

五

ダヴーはナポレオン皇帝のアラクチエーフで、——このアラクチエーフは臆病ではなかったが、やはり同じように几帳面で、冷酷で、冷酷以外におのれの忠誠を表明することのできぬ男だった。

国家組織という機構の中には、ちょうど自然という組織体の中に狼が必要なのと同じく、こうした人々も必要なのであって、その存在や主権者に近い地位がいかにそぐわないものであろうとも、彼らは常に存在し、出現し、その地位を保っている。進んで擲弾兵の口ひげまで引き抜くほど残酷でいながら、神経の弱さから危険には耐えきれない無教育な、およそ廷臣らしからぬアラクチエーフのような者が騎士のように高貴優雅な性格のアレクサンドルの側近でかような勢力を保ち得たということも、この必要性という一事よってのみはじめて説明がつくのである。

バラシエフが農家の納屋で見つけたダヴー元帥は樽に腰をかけて書類調べをやっているところだった(彼は計算書をしらべていたのである)。そのそばには副官が侍立していた。もつとい宿舎を見つけることもできたのだが、このダヴー元帥という人は自分が陰気な人間でいられる権利を保有しておくためにわざと自分をもつとも陰気な生活環境の中に置いておく人々の一人だった。こういう種類の人々はそのために常にあくせくと、執念深く仕事をやるものである。(「こらんのとおり、薄汚い納屋で樽に腰かけて働いてこのわたしに人間生活の幸福な面など考えている余裕がどこにあるか」彼の顔つきはそう語っていた。こういう連中の大きな満足と要求といえば、それは生き生きとした生活に直面した際、その活気に面と向って自分の陰気で執拗な仕事ぶりを投げつけてみせることである。バラシエフがダヴーのもとへ案内されて来たときも、彼はこの満足を自分に与えることができた。ロシアの将官が入ってくると、彼はいつそう自分の仕事に専念し、美しい朝とミニラーとの座談の影響で元気づいていたバラシエフの顔を眼鏡越しにじろりと見やつただけで、立ち上がることはおろか、身動き一つせず、いよいよ洗面を作って、さも憎さげに、にやりと笑った。

この応待によって生じた不快な印象をバラシエフの顔に認めると、ダヴーは頭をもたげて、何の用だ、と冷やかにたずねた。自分が自分にこんな態度をとり得たのは、自

分がアレクサンドル皇帝の侍従武官である上にナポレオンに対する皇帝の代表だということをダヴーが知らないからだと思したので、バラシエフはさつそく、自分の身分と使命とを告げた。が、彼の期待に反して、ダヴーはバラシエフの言葉を聞き終ると、いっそう、がさつな、粗野な態度を見せはじめた。

——「いったい、あなたのその書状はどこにあるのかね?——と彼は言った、——へそれをよこしなさい、わしが陛下へ送るから」。

バラシエフは書状は直接、皇帝自身に手渡すよう命令されているから、と言った。

——「あなたのほうの皇帝の命令は、あなたの軍隊内で行われるもので、ここでは——とダヴーは言った、——あなたは言われたとおりにしなくちゃいかんよ。」

そして、相手の一身が粗暴な力にかかっていることをいっそうロシアの将官に思い知らせようとするかのように、ダヴーは当直将校を呼びに副官を派遣した。

バラシエフは皇帝の親書を入れた封書を取り出すと、それを卓上に置いた(卓といつても、それはちぎれた蝶番が突き出たままのドワを二つの樽の上に差し渡したものにすぎなかった)。ダヴーは封書を取り上げて上書きを一読した。

——「あなたがわたくしに敬意をお払い下さるうと、下さるまいと、それはもちろんご勝手ですが、——とバラシエフは言った、——しかし、わたくしが皇帝陛下の侍従武官という地位にある身であることだけはお心にためておいて